

情緒の安定

「認知症は治らない」ことはこれまでお話ししたことで、すでに分かりかと思えます。

では、認知症になってしまったら、家族はどうすればいいか。

認知症になってしまった人の「情緒の安定」を何よりも大事にすること、これが認知症の介護の基本です。

ですから、介護の専門家（プロ）たちは、どうしたら認知症になつて



しまった人が安定した精神状態で残りの日々を暮らしていけるのか、そのことに心を砕いているのです。

また、時間が許す限り、その人の話を聞いてあげることにも重要です。子どものころの話、楽しかった話、孫の話、趣味の話……

「ふーん、そうなんだ。すごいー！」

前に聞いたことがある話でも初めてのよう感動して聞いてあげると、お年寄りが心を開いてくれます。そこに、笑顔も生まれるでしょう。また、心を許していることができれば、タッチン

グといって、体に触れてあげるともできます。

スキンシップによる信頼が、そこに生まれてきます。

そのうち、この方が音楽が好きだということが分かれば、若いころに聞いた思い出の曲がまつたCDを聞かせてあげるともできます。

実は、こうしたことによつて、認知症になつてしまったために生じる徘徊、*せん妄、被害妄想などの随伴症状の改善を、プロは図っているのです。

認知症の中核症状は治らないと言いました。でも、随伴症状の進行を止めることはできるので、対応次第で良くも悪くもなるのが認知症介護の現状です。

*せん妄とは意識障害が起り、頭が混乱した状態をさします。

様々な症状を引き起こすことがあり、健康な人でも寝ている人を強引に起こすと同じ症状が出現することがあります。高齢者に多く見られ、入院中にせん妄を経験することがあるそうです。

高齢者の体シリーズ⑮ 『急に息が苦しく、胸が痛い！』

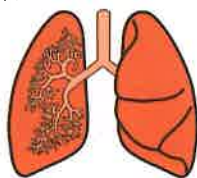
副院長 八鍬秀之

久しぶりの遠距離深夜バスでの一人旅。ゆっくり羽根をのぼそう。目的地にやっと到着。バスを降りて歩き出したら急に息が苦しくなり胸も痛い。目もくらみ立つてられなうい。

これは肺動脈血栓塞栓症（肺梗塞）の典型的な発症のしかたです。下肢の静脈に形成された血栓（血液の塊：深部静脈血栓）が歩行により肺動脈に飛んで閉塞したための症状です。

症状は突然の息切れ、胸痛、めまいや失神発作などです。

死亡率は10〜30%ととても危険な病気で、突然死の原因にもなります。エコノミークラス症候群としても有名



です。長時間窮屈な姿勢を保つと、血液の流れが停滞し血栓が形成され発症します。手術後の安静後や、避難所における車中生活での発症も有名です。好発年齢は60〜70才代です。特に女性に多くみられます。一般の血液検査、レントゲン、心電図では特異な変化が見られないのがやっかいです。低酸素血症を認め、疑があればCTスキャンで確定診断します。

この病気は早期診断、治療が大事です。前記のような状況や症状があったら、すぐに救急車を要請し、循環器の救急医療を行つている病院を受診してください。



予防は窮屈な姿勢を長時間とらず、適度な歩行や屈伸運動などを心がけること。

また脱水は血栓形成を助長するため、十分な水分補給をすることが重要です。



肺動脈血栓塞栓症を念頭に置いて、旅行や日々の生活に注意して暮らしましょう。